

サランの戦士 ~ Little Hero Paradise ~

Division D1:第1回ジャーナル

‘謎な駄菓子屋さん’

Written by 内藤明亜



お知らせ :このページ (ジャーナル表紙)に入るイラストをイラスト投稿掲示板にて募集中。

サランの戦士 ~ Little Hero Paradise ~

初詣

新春。その日はよく晴れた縁日日より。寒いけれど、空気の澄んだ冬の空はどこまでも青い。そこは綱達彦にとっては馴染みの神社。いつもは閑散とした境内も、縁日が開かれる今日ばかりは大勢の人で賑わっている。

「この神社、ずっと昔に来たことあるよ」

ふと、思い出したように香織が言った。

「この神社の神様、ネコの神様なんだった」

「ニャ～。どこかでネコの鳴き声がした。」

「一度、ご神体を拝んでみたいものです」

「でも、ネコの神様ってどんなだろう？」

蛸が妙な顔をして聞いてきた？

「ネコの神様なんてあんまり知らないし」

「招き猫かもしれませんね」

「うぶぶ、招き猫？ いくら何でもそれはないんじゃないの？」

蛸は思わず、本堂の奥に鎮座している招き猫のご本尊を想像して、吹き出してしまった。招き猫は商売繁盛の縁起物には違いないけれど、あれを神様にして神社に祀って拜むというのは、ちょっと。

「さあ、私たちもお参りに行きましょうか」

達彦は香織と蛸をうながして本堂に向かう。香織も蛸も今日の縁日に達彦が引っ張ってきたのだ。達彦にとっても香織と蛸にとっても、友達を沢山作る事は大切。人と交わらなければ人を見る目も養われない。なんてことを達彦は考えているのだが、声に出して言うにはまだまだ人生経験が不足している。

賽銭箱にお賽銭を投げ、ガラガラと鈴を鳴らし拍手を打つ。達彦がお祈りすることは香織さんの平穩。だけど自分の事は神頼みでなく、自分で実行するのが達彦の主義であるからして。

おみくじ

「ねえ、達彦は何をお祈りしたの？」

蛸が聞いてきた。でも達彦は微笑んで答える。

「願い事は秘密です」

「それじゃ私も ないしょ」

蛸も、続いて香織も微笑んで言う。

「じゃ、私も願い事が叶うまで秘密にしよっと」

「だけど私の願い事、叶うのかな～？」

達彦は急に大人びた顔になって言った。

「願いの為には努力もしましょう。ただ、それ

が正しい努力であれば良いのですけれども」

「ねえ、おみくじ引かない？」

「いこう、達彦。みんなでのおみくじ引こう！」

三人仲良くおみくじを引く。まっ先におみくじを開いたのは蛸。そのとたん、蛸は素っ頓狂な声をあげた。

「ちょっと！ 何よ、このおみくじは!?」

香織も奇妙な顔をして、開いたおみくじに見入っている。

「これ どういう意味？」

達彦も神秘的な顔をして自分のおみくじを見つめ、さらに二人のおみくじと見比べる。

「私も同じでした。しかし、妙ですね」

おみくじには普通、大吉とか中吉とか吉とか末吉とか、あるいは凶とか大凶とか書かれているものだ。しかし三人が引いたおみくじに描かれていたのは、見事なネコの足跡だった。肉球のついたネコ足に朱を塗って、ペタリとスタンブしたような、そんな感じなのだ。そのネコ足マークの上にはこんな言葉が書かれていた。

魔法の駄菓子屋 ねこにゃん堂本舗」

子どものお客様、大歓迎。

さらにネコ足マークの下には道案内の地図が描かれている。

「この地図に従って歩けばいいわけですね」

で、その店は神社の人気のない裏参道の、鎮守の森の暗がりにひっそりと建っていた。

「で、これがそのお店なのですか？」

一見、何の変哲もない露店である。駄菓子屋の名の通り、色とりどりのキャンディーやら鉛色の干物やらがプラスチックの瓶に収められて店先に並んでいる。その他、プラスチックのお面やらメンコやカードやら、おもちゃの剣やサングラスやら、どこか一昔前の懐かしいお子様向けのおもちゃが店先に所狭しと並んでいる。だが、店には誰の姿もない。

「お留守なのかな？」

蛸は店の中をのぞきこんだ。そして露店の売り台の向こう側に奇妙なものを見つけた。コタツである。

「あれ？」

コタツなんてものは普通、こんな神社の露店には置いてない。コタツのそばにはポータブルテレビが置かれ、ワイドショーをやっている。

サランの戦士 ~ Little Hero Paradise ~

そしてコタツの上には食べ物の皿が置かれ、香ばしい匂いを漂わせている。

「これ、アジフライの匂いね。」

と、コタツ布団の中から白い手がにゅっと延びて、コタツの上のアジフライをつかんだ。

「あれ？ あれ？ あれ？」

誰かがコタツの中にすっぽりもぐって布団の中から顔だけ出して、アジフライをムシヤムシヤやりながらテレビを見ているのだ。

「なんか 怪しいお店ね。」

たじろく蛭と香織。

「いちおう声をかけてみましょうか。あの～、ごめんくださーい！」

意を決して達彦が声をかけると。

「んにゃ？」

調子つ外れの声が返ってきて、コタツ布団の中にいたそれがむっくりと起きあがり、その姿をさらけ出した。着物姿のお姉さまであった。なぜか頭にはネコの耳。その耳がびくりと動く、どうしても作り物の耳には見えない。

「あ、あなたは。」

蛭の問いかけに、ネコ耳のお姉さまは奇妙に甲高い声で答えた。

「えっへん。我が輩はネコである。名前はまだ無い。ところでこのお店に来たってことは、おみくじの中に混ぜておいた招待券を君たちが引き当てたってことね？」

三人、そろって例のネコ足マークの紙片を見せると、お姉さまはにっこり笑った。

「よろしい。君たちは運がいいわ。」

「で、このお店は普通のお店とはちょっと違うような気がするんですけど。」

「その通りよ。このお店は魔法のお店。その招待券がない限り、このお店は目には映らないし、ここに来て買い物をするのもできないの。でも、君たちが招待券を引き当てたってことは、君たちには何か特別な使命がありそうね。それじゃ、お近づきのしるしに。」

お姉さまは店先にあるキャンディーのプラ瓶から色とりどりのキャンディーを取り出すと、三人に一つずつ配った。

「これは無料サービスよ。さあ、召し上がれ。」

「それじゃ、いただきます！」

蛭は青いキャンディーを、香織はピンクのキャンディーを口に放り込む。達彦はちょっとためらった後に、黄緑のキャンディーを口に入れた。すると、三人の体がぼおっと光り始めたでは

ないか。蛭は青、香織はピンク、達彦は黄緑に、まるでネオンのように光っている。

「すごい！ 光ってる！」

「それはイルミナ・キャンディーよ。暗い場所で物を探す時や、仲間とはぐれないための目印に使えるわね。その他にも、色々な効果を持ったお菓子があつたのよ。」

「ふうん。ねえ、これは？」

蛭は店先にあつた剣のおもちゃを手に取り、しげしげと見つめた。

「あ、これってよくみたら、剣の形をしたチョコプレートね。刃の部分が銀紙で出来てるわ。こんなんじゃない、なんにも切れないよね。」

何気なく、蛭はチャンバラごっこをするように、その剣で達彦を斬る真似をした。

「えい！ やあつ！」

ところが、切れてしまったのだ！

「あ～っ！」

銀紙とチョコでできているはずの剣が達彦の横腹にめり込み、おへそのあたりで刃が止まっている。お姉さまがにっこり笑って言った。

「切れないようでも切れちゃうのよね。」

「ねえ、達彦 痛くないの？」

「別に。ただ、何かが当たっているような感じはあるけど。」

再びお姉さまが笑って言う。

「痛くないように出来てるの。だって、楽しく遊ぶためのおもちゃの剣だもの。」

言って、お姉さまは自分の左手を目の前にかざすと、銀紙とチョコの剣を右手に持って、その剣で勢いよく左手に斬りつけた。

「すば～ん！」

お姉さまの左手の肘から先がすっ飛んで、くるくると宙を舞う。それをお姉さまの右手がさつと受け止める。まるで放り投げたバトンを空中でつかみとるように。

「こんな風に遊ぶこともできちゃうわけね。」

「きゃ～っ！」「こわすぎ～！」

大きさにこわがってみせる香織と蛭。しかし達彦は切断されたお姉さまの左腕を、さも興味深そうにまじまじと見つめる。切断面はきれいな平面で、血は一滴も流れていない。

「元通りにするには、どうするんですか？」

「切り口をくっつければ、すぐに元通りよ。」

言って、お姉さんは切り離された左腕を肘にくっつける。腕は見事につながり、お姉さまはその手をひらひら動かしてみせた。

サランの戦士 ~ Little Hero Paradise ~

「その剣、いくらですか？」

「サービス価格で300円よ」

「で、銀紙の中のチョコも、ちゃんと食べられるんですよね？」

「もちろん！ でも、チョコを食べちゃった

ら、剣は使えなくなるわよ」

ふと、達彦は露店の店先に貼ってある張り紙に気付いた。

この子を探してください。迷子です。

この子を見つけてくださった方に、お礼申し上げます。

それは、迷い幻獣の搜索願이었다。

次回選択

ア :ハピネス・プリンを探す

イ :マンドラゴラを探す

ウ :シルウスを探す

エ :クリームスタンを探す

その他